
蔵の中の幽霊

kotorinakisekai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蔵の中の幽霊

【Nコード】

N4825Q

【作者名】

k o t o r i n a k i s e k a i

【あらすじ】

少年の親はしつけのために少年を蔵の中に入れることがあった。初めは恐ろしかった蔵の中も、何度か入れられているうちに少年は慣れてしまった。それに……蔵の中には親しくなった幽霊がいる。

【この作品は他サイトと二重投稿しています】

「その中に入っていないさい！」

母親がそう叫んで蔵の中を指さす。少年はめんどくさそうに母親を見ると大人しく蔵の中へ入って行った。

「いい？ 反省するまでそこにいるのよ？」

「うん」

まるで反省している様子が……というか怖がっている様子が無い少年を見て、母親はため息をついた。しかし今更出ろという訳にも行かず、母親は扉を閉めて鍵をかける。

少年は扉が閉められると座り込んで天井を見上げる。

少年はしつけのために閉じ込められた。悪いことをしたからここに入れられた。頭ではそう分かっていても実感がわかなかった。だって苦痛じゃないのだから。

初めてここに閉じ込められた時は怖かった。光が届かず、嫌なおいがする蔵の中。

いつまで入れられているのか？ ひよっとしたら忘れられてずっとこのままなんじゃないか？ そう考えたら怖くて怖くて仕方が無かった。やっと外に出してもらった時は泣き叫びすぎて喉がかわれていた。

しかし、二回、三回と閉じ込められる度に慣れて行った。今では全く怖くない。蔵の中なんて暗くて、ちよっと臭いだけだ。しかも必ず出してもらえる。苦痛になるはずが無かった。

「やあ、また閉じ込められたのかい？」

（そう言えば、最初の頃はこの幽霊も怖くて仕方が無かったっけ……）

少年は心の中で呟いてその幽霊を見上げた。

幽霊は半透明で、少年の姿をしていた。初めてここに閉じ込めら

れた時に初めてここに出会った。幽霊の方から声をかけてきたのが、混乱しすぎていてどんな言葉をかけられたのか覚えていない。怖がらせるようなことは言っていなかったと思うが……。

蔵から出してもらった時、母親に幽霊の存在を訴えた。母親は一度面喰ったようだったが、すぐにそれはお前の魂を狙っているから気をつけろと脅された。そう言って脅しておいて、また蔵の中に閉じ込めたのだから、少年からすれば薄情な親にしか見えなかった。

二度目もあり会話にならなかったと思う。近くに落ちていた棒を必死に振り回していたはずだから。それを幽霊は笑いながら見ていた。

三度目になると少し慣れてきた。少なくとも魂を取るような存在ではないと認識した。幽霊は優しい表情をしていたし、幽霊は淡い光を放っていたので、暗い蔵の中ではむしろ助かった。

怯えながら話す少年を、幽霊は諭すように接してくれた。

幽霊の話は面白かった。少なくとも学校の友達とは違うことをよく知っていたし、話すのがうまかった。少年はだんだん幽霊を友達だと思うようになっていた。

「今日はどんなことをしてここに入れられたんだい？」

半透明の幽霊は少年の上を浮遊しながらそう話しかけてくる。

「壺を割ってやったんだ。おじいちゃんが大切にしてる奴を」

幽霊はふむふむと言って少年に近づく。

「割ってやったっていうのが気になるね。わざと割ったのかい？」

「そうだよ」

少年は悪びれることなくそう答える。

「なんだってそんな馬鹿なことをしたんだい」

「だってそうしないと君に会えないじゃないか」

幽霊は蔵に入るたびに現れた。逆にいえば蔵に入らないと出てきてくれなかった。だから、幽霊に会うためには蔵の中に入らなければならぬ。しかし、蔵の鍵は母親が持っている。つまり、幽霊に会うためには蔵に入れられる程度に悪いことをしなければならぬ。

「僕に会うために叱られるようなことをしたのかい？　嬉しいような、悲しいような・・・」

「いいんだよ。もともとあの壺嫌いだったし。蔵に入れられるのももう怖くない」

幽霊は少年を見て微笑んだ。

「苦痛を伴っていない時点で罰ではないね。昔鞭で人を叩く罰があったそうだけど、それが嬉しいと感じる人にとっては罰にならないように」

「鞭で叩かれたら嫌に決まってるじゃないか。それが嬉しいと感じる人なんているの？」

「君だって初めて入れられた時は赤子の様に泣き叫んでいたじゃないか。それが今ではそんな風に落ち着いていられる。それと同じだよ。鞭に叩かれるのが苦痛じゃない人だってきつと思うよ」
少年は首をかしげた。鞭で叩かれるのが苦痛じゃない人なんて本当にいるのか？

分かっていない風の少年を幽霊が笑う。

「君には早すぎる世界だね」

「一生理解できそうにない世界だよ。でも……罰になって無いっていうのはお母さんも思っているかも。さっきそんな表情をしていたから……」

「そうなんだ。じゃあ僕と会うのはこれが最後かもしれないね」

「えッ！　どうして！　君どこかへ行っちゃうの！？」

少年が幽霊の言葉に突然狼狽する。

「僕は何処へも行ったりしない。でも、君がここに来ることは無くなると思うよ。だって君の母親は君が蔵に入れられるのが苦痛じゃないと気付いているんだろう？　だったら蔵に入れたって意味が無いじゃないか。今度はきつと鞭で叩いてくれるよ」

そう言って幽霊は笑う。少年は笑い事じゃないという風に叫ぶ。

「鞭に叩かれるなんてどうでもいいよ！　それより僕は君に会えなくなる方がよっぽど辛い」

「嬉しいことを言ってくれてももう遅いよ。君が蔵に入れられる時と出される時にくらい、『僕はとっても辛かったです』って演技すればよかったのに、さも平気なように入ったりするからいけないんだ」

「だったら最初に言ってくればよかったじゃないか！」

もはや奴当たりだった。幽霊の表情はそれでも穏やかだった。

「そんなに僕と離れたくないなら一つ方法があるよ」

「どんな方法？」

幽霊は暗の奥へ進んで行って、大きな箱を蹴飛ばして開いた。

「この中に入るんだ」

「箱の中に？ そしたらどうなるの？」

「詳しく説明してもきつと君は分からないよ。簡単にいえば僕と一緒にいられるようになるって感じかな？」

少年は箱の中を覗き込んだ。対して深くないはずなのに、箱の中は真っ暗で底が見えず、とても不気味だった。

少し考えた後、少年は言った。

「僕……入るよ！ 蔵に初めて入れられた時も怖かったけど何にも無かったし、きっと大丈夫だよね？」

「ああ、大丈夫だよ」

そう言った幽霊があやしく笑った気がしたが、きっと気のせいだろうと考えて少年は箱の中に入った。

それからしばらくして母親が暗のドアを開けた。しかし、子供の姿が無い。

「箱の中に隠れているのね。脅かすつもり？ これじゃあ蔵に入っても意味が無いわね」

母親は別のしつけの方法にしようと思いながら蔵の中を探し始めた。

しかし、どれだけ探しても子供は見つからなかった。探してる途中でこっそり外に逃げたのかと思って、晩御飯まで待ってみたが帰

ってこない。母親はいよいよ心配になって警察に電話した。

「おかしいんです！ 確かに鍵を閉めたはずなのに中にいなかったんです！ 蔵にはあそこしか出入りできる場所は無いの！」

「奥さん落ち着いて。本当に鍵を閉めたんですか？ 鍵を閉める時開ける方に回したんじゃないませんか？」

「そんなはずありません！ 確かに音がしたんです！ 開ける時だって鍵が開く音がした！ 早く探してください！！」

母親はそう言ってヒステリックに叫ぶ。警察は「分かりました」と言って母親との会話を切り上げて捜査に出かけて行った。

だが見つからない。日を追うごとに人数を増やして、捜査範囲を拡大しているのに、少年を見つけることはおろか、目撃証言すら得られることはできなかった。

次第に周りの人たちは、これは『神隠し』なんじゃないかと噂し始めた。それは主に老人が言い始めたことだが、母親はもしかしたら本当にそうかもしれないと思い始めていた。

あの日自分は確かに鍵を閉めたのだ。蔵の中は歩けば結構音がする。だから自分が蔵の中を探している間に外に出たなら必ず音がしたはずだ。それなのにそれも無かった。神隠しと言わなければ説明がつかない。

「ここからどうやって……」

母親は蔵の中にいた。当然子供はいない。

『お母さん！ ここだよ！ 僕はここにいるよ！』

幽霊となった少年が必死にそう叫ぶ。しかしそれは母親には届かない。

『何で悲しんでんだよ？ お前は俺と一緒にいたかったんだろ？ よかったじゃないか。これからはずっと一緒にいられるぜえ？ ハハハ！』

蔵の中にいた幽霊はそう言って笑った。

『うるさい！ 僕を幽霊にして……。お母さん！ ここだよ！ 分

からないの!?!」

母親は暗の奥にある大きな箱を見つけた。他のものと比べて明らかに大きい。子供一人くらいなら隠れるには十分だ。

母親はその箱に近づいて箱を開けた。……何もない。当然だ。

「引っ越そうかしら……」

母親はそう呟いて蔵を出て行く。

『お母さん! お母さん!』

必死に自分を呼ぶ子供の存在には気付かずに……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4825q/>

蔵の中の幽霊

2011年8月3日03時23分発行